

2010 年 7 月 12 日

## 博士学位（課程外）申請論文本審査報告書

早稲田大学大学院

経済学研究科長 永田 良 殿

主査 鈴木健夫（早稲田大学政治経済学術院教授 博士（経済学）（早稲田大学））

副査 南部宣行（早稲田大学政治経済学術院教授）

副査 斯波照雄（中央大学商学部教授 博士（経済学）（中央大学））

学位申請者 谷澤 毅（経済学研究科博士後期課程 1991 年 4 月 1 日入学/1998 年 3 月 31 日退学）

学位申請論文 北欧商業史の研究

予備審査判定日 2009 年 9 月 16 日

審査委員は上記の学位申請論文について、申請者に対する口頭試問（2010 年 7 月 2 日）を実施し、予備審査に基づく修正要求への対応等を含めて慎重に審査した結果、下記の評価に基づき、同論文が博士学位に値すると判定し、ここに報告する。

### 記

## I 本論文の構成と概要

### 1. 本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

凡例

序論

1 問題意識と研究動向、本論文の構成

2 史料について—ポンド税台帳—

注

第 1 部 バルト海・北海間商業におけるリユーベック

第 1 章 ハンザ盛期におけるバルト海・北海間の内陸商業—リユーベック・オルデスロー間商業の記録から—

はじめに

1 内陸路によるバルト海・北海間の連絡

2 内陸路によるバルト海・北海間商業—リユーベック・オルデスロー間の商品流通を手がかりとして—

(1) リユーベックのバルト海・北海間商業 (2) バルト海向け輸出商品

(3) 北海向け商品

### 3 輸送—トラフェ川の水運

小括

注

## 第2章 ハンザ後期におけるバルト海・北海間の内陸商業—リューベック・ハンブルク間商業の記録から—

はじめに

- 1 本章で依拠する史料について
  - 2 リューベック・ハンブルク間の経路
  - 3 リューベック・ハンブルク間の商品流通
- (1) 概要 (2) 主要商品

小括

注

## 第3章 リューベックにおけるロシア・リーフランド製品の流通

はじめに

- 1 リューベックの対ロシア・リーフランド商業
  - 2 ロシア・リーフランド製品流通の背景—蜜蠟の場合—
  - 3 リューベックにおけるロシア・リーフランド製品の流通
- (1) ポンド税台帳の記録 (2) リューベック商人の申告証書の記録

小括—第3章のまとめと第2部への展望—

注

## 第2部 世界経済形成期のハンザ商業—国際商業のなかのハンザ都市—

### 第4章 ハンザ転換期におけるバルト海情勢と国際商業

—リューベック・オランダ・デンマーク—

はじめに

- 1 ハンザ・オランダ関係の変化
  - 2 オランダのバルト海進出とハンザの対応
  - 3 ハンザ・オランダ・デンマーク
- (1) ハンザ・デンマーク関係の変化 (2) ハンザ・デンマーク戦争
- (3) ハンザ・オランダ戦争

小括—ハンザ都市間の利害対立—

注

### 第5章 バルト海・北海間商業におけるリューベックとダンツィヒ

はじめに

- 1 ダンツィヒの海上商業
- 2 リューベックの海上商業
- 3 リューベックとダンツィヒの商品取引

小括—ハンザの衰退について—

注

### 補論 スウェーデン産銅の流通とリューベック

はじめに

- 1 ヨーロッパ経済のなかのスウェーデン産銅

## 2 スウェーデン産銅とリューベック

注

### 第6章 ケルンの通商動脈とバルト海商業

はじめに

#### 1 ケルンの取引網

#### 2 ケルン商人の北ドイツ・バルト海商業

##### (1) リューベック (2) ダンツィヒ

#### 3 交易路—ケルンの通商網のなかのリューベック・バルト海

小括

注

### 補論 ケルンの対イングランド商業—ハンザ除名の経済史的背景—

はじめに

#### 1 ケルンとイングランド

#### 2 ハンザ内におけるケルンの孤立—ハンザからの除名—

小括

### 第7章 ハンブルクの商業発展と大陸内商業

はじめに

#### 1 ハンブルクの商業発展—ハンザ時代からの概観

#### 2 大航海時代の到来とハンブルクの商業

#### 3 ハンブルクと大陸内諸地域との商業関係

##### (1) 中世後期のエルベ川河川商業 (2) ハンブルク・ライプツィヒ間商業

##### (3) 17世紀におけるエルベ川商業の展開

小括—第7章のまとめと第3部への展望—

注

### 第3部 ハンザ後期リューベックのバルト海内商業

### 第8章 スコーネ（ショーネン）を中心としたデンマークとの商業—15世紀末のポンド税台帳の記録から—

はじめに

#### 1 商品

##### (1) リューベックの輸入—鯨を中心に— (2) リューベックの輸出—塩を中心に—

#### 2 商人

#### 3 船長・船舶

小括

注

### 補論 リューベックの対メクレンブルク・ポメルン商業

はじめに

#### 1 取引相手都市の確認—史料制約との関連で—

#### 2 商品

#### 3 商人

#### 4 船長・船舶

小括

注

第9章 ドイツ北部・デンマーク間の商業関係―バルト海南西海域を舞台として―  
はじめに

1 近世リューベックのバルト海商業

2 ドイツ北部の対デンマーク商業

(1) 航海 (2) 商品

3 デンマークの対ドイツ商業

小括

注

結び

図表

参考文献

## 2. 本論文の概要

本論文は、14世紀から17世紀にかけての北欧商業の歴史的展開を、主としてドイツのハンザ都市リューベックの対外商業の推移を軸にして論証し、その世界史的意味を確認しようとした研究である。それは、具体的には、ハンザの盛期からオランダがバルト海に進出していく過程においてバルト海・北海間商業の主要交易路がそれまでのリューベック・ハンブルク間の内陸路からエーアソン海峡経由の海路へと大きく変化していく歴史的变化を、主としてリューベックの商品取引の実態の実証的分析を通して確認し、そこにみられるハンザの歴史的変質と「ヨーロッパ世界経済」(ウォーラーステイン)の形成とを浮き彫りにし、そして同時に、そうした時代の変化にあつてのリューベックの対外商業の新たな存在形態を確認しようとした研究といえる。

本論文は序論に続いて3部構成になっており、第1部(第1章―第3章)ではハンザ商業の動脈であったリューベック・ハンブルク間内陸路経由のバルト海・北海間商業の構造が検討され、第2部(第4章―第7章)では近世「ヨーロッパ世界経済」形成期におけるリューベックその他の主要ハンザ都市の商業がハンザ都市間の関係の変化を検討しつつ考察され、第3部(第8章―第9章)ではハンザ衰退期におけるリューベックのバルト海近隣地域との商業が検討されている。

序論・各章の概要は次の通りである。

「序論」において、著者は、まず、従来のハンザ史研究の伝統に従い、ハンザ組織の歴史を発展期・盛期・衰退期に分け、なかでも15世紀前半に転換期があつて同世紀後半には衰退期に入ったという見解を明記し、そうしたハンザの商業の歴史的展開をリューベックを中心にし、そして「主に通商網の広がりを中心としながら、取引相手先や流通する商品、取引の頻度などを分析手段として」検討するという、本研究の基本的視座を記している。続いて、ハンザ・北欧商業圏を対象とした研究史が概観され、「広域的な視野に長期的な観点が加味された研究も多い」ものの、「ハンザを包摂する世界経済がハンザ・北欧商業圏にどのような影響を与えたかということが踏み込んで論じられていないこと」が指摘され、本研究の意義が記されている。加えて、本研究が依拠する主要な史料であるポンド税台帳の史料的な価値と欠陥について説明され、史料的限界に留意しながらこの貴重な史料を用

いて分析を進めたことが述べられている。

第1章では、1368年のリューベックの関税（ポンド税）台帳を分析して、取引の商品（バルト海向けには毛織物等、北海向けにはバター、蜜蠟、鯨、銅、毛皮等々）や輸送状況が明らかにされ、ハンザ盛期のバルト海・北海間貿易においてリューベック・ハンブルク間内陸路が大きな経済史的意義を果していたことが、そして一大商品集散地としてのリューベックの経済にとってはこの内陸路が「生命線」の意義をもっていたことが、強調されている。リューベック・ハンブルク間内陸路とそれを利用した商品取引の実態についての詳しい説明の前提には、従来の研究にはその十分な解明がなかったという著者の認識がある。

第2章では、15世紀後半から16世紀前半にかけての、ハンザがその盛期を過ぎた時期（ハンザ後期）について、リューベック商人の申告証書（Lübecker Zertifikat）を分析して、海路によるバルト海・北海間取引が増加するなかでもリューベック・ハンブルク間内陸交易路がなお一定の役割を担っていたことが、両都市間を往来する商品の構成、取引頻度、取引量などの解明に依拠して、主張されている。ハンザ盛期に頻繁に流通していた商品はハンザ後期にも流通の中心であったと指摘されている。

第3章では、内陸交易路によってリューベックからハンブルクへと運ばれた商品のうちで主要な位置を占めたロシア・リーフランド産品とその取引の実態について、1368／1369年および1492—1496年のポンド税台帳、リューベック商人の申告証書（1436—1527年）そして先行研究に依拠して、明らかにされている。ハンザ盛期から後期にかけて蜜蠟と毛皮が西欧への流通の中心であり、後期になると蜜蠟取引が勝っていたことが数値によって論証され、蜜蠟取引増加の原因（キリスト教普及による需要増加、東欧における植生・養蜂形態の有利性）が検討されている。

第4章では、15世紀前半にオランダがエーアソン海峡経由の海上交易路によってバルト海・北海貿易の主導権を掌握するなかでおこったハンザ商業の構造的変化について、先行研究に依拠して、ハンザ・オランダ・デンマーク三勢力間の利害関係の検討を通して解明されている。デンマークはリューベックに代わってオランダとの関係を商業的に優遇し、オランダはバルト海東部のハンザ都市との取引の自由を確保し、ハンザ都市間の商業的利害対立が表面化し、リューベックはバルト海・北海間商業の大動脈から外れていく経緯が説明され、この時期が組織としてのハンザの転換期となった理由について著者の見解が指摘されている。

第5章では、15世紀後半から16世紀前半にかけてオランダのバルト海進出が続くなかバルト海・北海間商業の基本構造がさらにどのように変化していったかについて、ポンド税台帳・船舶出港記録（リューベック）やプファール税の記録（ダンツィヒ）および先行研究に依拠して、ダンツィヒとリューベックの海上商業および両都市間の商品取引の解明を通して検討されている。この検討から、オランダ船舶によるダンツィヒからの西欧向け穀物輸出の増大とリューベック・ダンツィヒ間取引の後退との具体的様相が明らかとされ、エーアソン海峡経由交易路の比重の拡大が新たな貿易システムの出現とハンザの貿易システムの衰退とを意味すること、その背後にはバルト海地域を食料・原料供給地として包摂する「ヨーロッパ世界経済」の形成があったことが主張されている。

なお、以上の大きな歴史的展開の理解を補足する議論として、本章の補論において、リューベック経由の内陸路による西欧向けスウェーデン産銅の取引がオランダ商人によって担われるようになり、さらに17世紀中頃までにはエーアソン海峡経由の海路による北

海側への直接的な銅輸出が主流になっていく過程が、先行研究に依拠して検討されている。

第6章では、「ヨーロッパ世界経済」の形成のなかでリューベックの商業基盤が切り崩される過程が、先行研究に依拠して、ケルンの商業取引網・交易路を解明することを通して跡付けられている。ダンツィヒ等に商品（ワイン、毛織物等）を運ぶケルン商人のバルト海商業は従前のリューベック経由ではなく、エーアソン海峡経由の交易路を利用するようになり、同時にそこにはライン川を利用して北は低地地方（ブリュージュ、アントウェルペン）・ロンドン、南はフランクフルト・イタリア・中欧に至るケルンの通商動脈が強化されていたことが論証されている。

なお、同じハンザ都市でも内陸のケルンの通商基盤が沿岸都市（リューベック等）のそれとは異なることを実証すべく、本章の補論において、15世紀のケルンの積極的な対イングランド商業と一時的なハンザ除名の問題が、先行研究に依拠して論じられている。

第7章では、第6章と同じく「ヨーロッパ世界経済」形成期におけるリューベックの商業基盤の変化を見据え、ハンブルクの国際商業の発展が、ポンド税台帳の記録および先行研究に依拠して検討されている。リューベック・バルト海、北海・大西洋、大陸内部の三方面に伸びていたハンブルクの交易軸で取引されていた商品が明らかにされ、なかでも大西洋沿岸各地と大陸内部とを結ぶ経済的機能が時代とともに強化され、これを通してドイツは「ヨーロッパ世界経済」に接続していったということが、そして同時に国際商業におけるリューベックの役割が後退したということが、主張されている。

第8章では、ハンザが衰退期にさしかかった時期におけるリューベックの国際商業の存在形態が、ポンド税台帳の記録（1492—1493年）に依拠して、対デンマーク商業の分析を通して解明されている。オランダの海路輸送の発達によってリューベックは北海・バルト海貿易の主導権を奪われるが、そうしたなかでの同市のデンマークとの貿易活動が、輸入商品（鯨等）・輸出商品（塩等）・商人・船長・船舶の実態を通して明らかにされ、バルト海南西海域を舞台とした同市の商業活動の歴史的意義が指摘されている。

なお、本章の補論においては、上記の議論を補足する意味で、同じ史料に依拠して、リューベックと近隣のメクレンブルク・ポメルンとの取引のおおよその状況が同じ分析方法によって明らかにされている。

第9章では、第8章と同じ問題設定において、17世紀のドイツ北部とデンマークとの取引関係が、リューベックとロストックの関税台帳の記録および先行研究に依拠して、航海・商品（デンマークへはバルト海各地の特産物や植民地物産等、ドイツ北部へは農産物等）の解明を通して、検討されている。この検討を通して、組織としてのハンザが消滅しつつあった時期にリューベックは、北欧の国際商業の拠点としての意義を失いつつも、バルト海南西海域内での商業拠点としての機能を顕著にし、そこに一つの商業圏が成立していたと指摘されている。

「結び」では、本研究の内容について、ヨーロッパ経済の長期的な大変動——世界経済の形成——というなかでのハンザ商業の歴史的展開をリューベックに視点を置いて検討したことが確認され、各章での検討内容が整理され、そして、今後の研究の展望およびハンザ研究の現代的意義について言及されている。

なお、以上の本論・補論は、第1章が『社会経済史学』（査読付）63・4、第2章、第5章補論、第9章が『北欧史研究』（査読付）20、10、15、第8章補論が『市場史研究』（査読付）19、第5章、第6章が『早稲田経済学研究』（査読制導入前）35、41、第4章、第

7 章、第 8 章が『長崎県立大学論集』38-4、39-4、32-4、第 3 章が早稲田大学現代政治経済研究所研究叢書 19『ロシアとヨーロッパ』、第 6 章補論が同 29『地域間の歴史世界』に掲載された論文に加筆修正して書かれていることを付記しておく。

## II 評価

14 世紀から 17 世紀にかけての北欧の国際商業の歴史的展開をハンザ都市リューベックの対外商業の実態の解明を通して検討した本論文は、オランダがバルト海に、そして世界に進出して「ヨーロッパ世界経済」が形成されていく時期にあつてリューベックが北海・バルト海間商業で果していた中心的役割を後退させざるを得なかったという大きな動向を、史料の限界に留意しつつ主要な取引商品・取引量・取引頻度等のデータを提示して論証しており、その論証には十分な説得力がある。組織としてのハンザは 15 世紀前半に転換期、15 世紀後半に衰退開始期を迎えるとして、ハンザ史における 15 世紀の位置づけを示すとともに、その理由がオランダの進出とそれに伴うハンザ内部の利害対立および世界経済の形成にあったとする著者の見解には相当の独自性をみることができる。

当時の大きな歴史的展開を商品流通の実態のデータを通して解明した本研究は、なかでもリューベック・ハンブルク間内陸交易路とそれを利用した商品取引の実態の解明などにみられるように、ドイツの学界においても詳しい研究がみられず、その点でいままでにない新しさがあるといえる。加えて、ハンザ商業史の観点からいえば、従来の研究は、商業史といっても特定の都市の商業、あるいは特定の都市間の貿易を対象としているか、ドランジェの大著に依拠するものが多く、本論文のように長期にわたるハンザ商業全般の動向を明らかにしている研究はわが国で最初であるだけでなく、ドイツにおいても類例を見出しがたく、その点で高い評価を与えることができる。

なお、論文の完成度をより高めるべく予備審査において改善が要求された諸点については現時点での最大限の努力がなされており、その結果、本論文においては、依拠している史料の性格がより明示され、他に補強し得る史料が紹介され、先行研究のさらに幅広い検討が施されて本論文の新しさがより明確とされ、また、ハンザ諸都市の商業・商人の実態についてより広い視野からの具体的解明がさらに加えられている。

以上